

れ、築道下遺跡V・VI期と整合する。ただし、築道下遺跡の場合はその後の変遷から、VI期を第IV四半期でも古段階に、小針型‘系’壺が終焉すると考えられるVII期を、その新段階に置きたい。

VIII期は6世紀の末葉から7世紀の初頭が相当しようが、須恵器の蓋を見る限り、7世紀には下らないかもしない。

(5) 小針型‘系’壺の評価

築道下遺跡の性格や集落の盛衰という点では、7世紀後半以降の土器様相を検討することも重要である。しかし、ここではそれを詳述する用意も力量もないため、古墳時代の壺類、特に小針型‘系’壺の消長とその背景についてだけ触れておきたい。

小針型壺の出現と社会状況の関係について、はじめて言及したのは斎藤国夫氏である。前段の年代観でも触れたように、氏は小針遺跡B地点の分析から3段階の変遷(その後の第3次調査では5段階)を示され、出現の時期をFA降下前後の6世紀中葉前後に求められた。そして、「直立していた口縁部が外に開いて行く変化。それに伴う口径の大型化が6世紀後半から7世紀の特徴である。次の段階として、「小型化の傾向へと向い、「さらなる小型化や暗文系土器、有段口縁壺と8世紀前半頃共伴することによってこの土器群は消滅する」とされた(斎藤1990)。

田中広明氏は小針型壺の出現を、「埼玉古墳群中の稻荷山古墳と二子山古墳に挟まれた、小円墳群の形成過程に変化の現れる段階」(田中1992)、終焉をTK43型式の段階(田中1991 以下の引用は全て同書)に位置づけた。前者は6世紀第II四半期、後者は6世紀末を指す。

築道下遺跡から出土した小針型‘系’壺についても、消滅の時期を除けば、斎藤氏が提示されたような変遷を跡付けることができる。すなわち、模倣壺の中から大型のものとして出現し、次第に口縁部の外反に伴う口径の大型化と扁平化が進行し、出土量(生産量)が増大して最盛期を迎える。しかし、それも長くは続かず、扁平化が進行したまま小型化へと転じ、出現時の

次いで、IX期は7世紀の第I四半期、X期は第II四半期に置く。

XI期は壺V類の出現する時期で、富田編年(坂野・富田1996)のIV段階(西暦660~675年)、XII期は同じくV段階(西暦675~695年)に相当しよう。XIII期は7世紀末から8世紀第I四半期ということになろう。

状況を裏返すかのように出土量は激減、急速に消滅するということになろう。

付け加えるならば、出現後は一気に多様化し、その中から数種の定形化・典型化したものが現れる。定形化しなかったものは継続せず、ごく短期間で姿を消していく。一方、定形化したものも継続性が強いとはいえない、同様の経過を辿る。

年代的には、6世紀第II四半期に登場し、瞬く間に食膳具の中心を占めるようになる。ところが、それも束の間、7世紀を待たずに急速に消滅してしまう。ということになる。

つまり小針型‘系’壺とは、極めて特徴的な形態と展開を示しながらも、驚くほどの短期間で自己完結してしまう土器なのである。

では、このような小針型‘系’壺の出現と展開・消滅の背景には、いかなる社会的状況が反映されているのであろうか。

斎藤氏は成立の背景について、「特徴ある土器の一群の出現は、埼玉古墳群における前述した六世紀中葉から後半にかけての政治的な変動期と一致し、その変動に何らかの外的な力を想定させるものである。」と捉えた。ここにいう特徴ある土器の一群とは小針型壺のこと、政治的な変動期とは、「鉄砲山古墳から将軍山古墳へと移行すると考えられる首長権の移動」を指している(斎藤1984 以下の引用は全て同書)。

これに対して田中氏は、出現の意味を「小針遺跡の隆盛は、小針型土器の独自の生産と、一中略一埼玉地域の墳墓の新たな編成秩序に支えられている。埼玉古墳群を軸としたネットワークは、本来、比企型壺の集

落を支持母体としていたらしい。その支持母体を払拭し、埼玉古墳群の家産的な集落が、独自の型式の食膳具を採用した」と評価した。

さらに小針型坏の供給圏は、『生出塚埴輪窯跡群の供給圏と一致し、いわば「埼玉経済圏」を形成する。この経済圏は、埼玉古墳群のもつ首長権(国造権)の影響範囲と政権の内部構造を示すかも知れない。』とし、小針型坏は、「生出塚埴輪窯跡群の埴輪の供給、とくに埼玉古墳群の新たな展開とかかわりがあったと考えた。田中氏は古墳よりも集落からの出土が遅れることから、小針型坏はまず、古墳への供献用土器として採用されたものと見ているようである。

両氏が述べるよう、小針型坏および小針型‘系’坏を、埼玉古墳群との関係抜きに語ることはできないだろう。分布圏は判然としないものの、独自の土器を出現させ、それを主体化させた背後に、大きな社会的・政治的エネルギーや、それに起因する変動を感じない訳にはいかない。

小針遺跡同様、築道下遺跡も古墳時代後期、5世紀の後葉から集落の形成が開始される。小針型‘系’坏出現以降に大規模化を遂げるが、それはあくまで集落の推移の中で捉えられる出来事であり、決して断絶がある訳ではない。6世紀末頃に小針型‘系’坏が消滅し、集落も一時衰退してしまう状況も含めれば、古墳時代の集落という意味での築道下遺跡の動静は、大要、埼玉古墳群のそれと一致しているといえる。

一体、小針型‘系’坏出現期となる6世紀の第Ⅱ四半期(あるいはそれ以前)、埼玉古墳群にはいかなる変容が起こっていたのであろうか。

斎藤氏は首長権の移動を考えた。これを古墳群の分析から導き出そうとしたのは増田逸朗氏である。氏は古墳群中の古墳を主軸方位や規模などから、稻荷山・二子山・鉄砲山古墳という大型墳グループ、愛宕山・瓦塚・奥の山古墳という小型墳グループ、中の山・将军山・丸墓山古墳という中型墳グループに分類した。そして、それぞれの変遷を示された上で、「将军山グループは稻荷山グループとは明らかに主軸の方位が異

なり、大きく西に振る。これは、稻荷山グループとは系譜的に異なり、愛宕山グループと同様に同一親族の別グループとして扱うことが可能である。ここに初めて稻荷山系譜の最高首長権が移動したことになる。』とされた(増田1982)。さらに、『日本書紀』安閑天皇紀の記事をふまえ、その時期を「畿内政権の強力な介入による埼玉政権の動搖期とし、これによる権力の移動を考え、屯倉設置もあり得る時期』と位置づけた。

これを受け、斎藤氏は「行田市北西部の地域集団の自立化と、比企地方における地域集団の分散化が示す状況が、鉄砲山古墳に示される代表的首長権の弱体化の背景」とし、将军山への転換を、「畿内政権による国造制という新しい支配体制の中に掌握されたことを意味する」と捉えた。

一方、田中氏は生出塚埴輪窯跡群の埴輪の供給と連動した、埼玉古墳群の新たな展開を想定されている。氏のいうところの「新たな展開」が何を指すのか、咀嚼し切れないところはあるが、小針型坏の出現を「小円墳群の形成過程に変化の現れる段階」とされていることから、増田氏の示した主軸方位の規制を意識したものかと思われる。その上で、「本来の比企型坏の食膳具集団の居住域に、強引に成立した小針型坏の食膳具集団は、生出塚体制の成立を背景としていた。しかし比企型坏の食膳具集団の支援なくしては、埼玉古墳群も成立しなかった」ことを導き出した。

終焉についてはどうであろうか。これも埼玉古墳群の動向に見てみたい。斎藤氏は「六世紀中葉前後に低湿地の開発を進展させ、さらに七世紀前後に最も拡大させた池守遺跡を初めとする北西部の地域集団は、その農業基盤を背景とし、また政治的な連繋の中から七世紀初頭から前半頃、将军山から首長権を獲得した。それは八幡山の出現において帰結したと思われるが、この場合の首長権は国造職の移動としてとらえられるものである。』と結論づけた。

増田氏はこの首長権の移動を、「氏族交替さえ可能性として十分考えられる。』としている。

これら諸氏の論点を、築道下遺跡に見る小針型‘系’壺の消長に応用するならば、おおよそ以下のようにまとめることができよう。

①沖積低地の開発で獲得した農業基盤を根拠に、行田市北西部の地域集団が自立し、比企地方ではその分散化が進行、比企型壺の供給圏が権力基盤であった稻荷山系の首長権は弱体化する。こうした状況を背景に、6世紀第Ⅱ四半期頃、国造制という支配体制をにらんだ畿内政権の強力な介入の下、同族内で首長権の移動が起きる。

この動きと連動して、その集団は生出塚埴輪窯跡群の埴輪生産・供給体制を背景として、強引に小針型‘系’壺を成立させる。

小針型‘系’壺は、そうした家産的集団(首長権を獲得した氏族グループ)の導入した、極めて属性の強い家産的な土器であった。このため急速に多様化し、形態的な安定(定形化)は図りづらかったものと推測される。供給も生出塚埴輪窯跡群の埴輪のそれを通じ、古墳への供献という形であり、食膳具として一般化し、広域に波及したものではないようである。その意味で、田中氏の「家産的」という見解は卓見であると思う。

このように考えると、小針遺跡や築道下遺跡は、将軍山古墳に代表される新たな首長集団と関係が深い集落ということになる。ただし、小針の集落は白色系の「小針型壺」を、築道下の集落は赤橙色の「小針型壺と類似する土器」を食膳具の主体とする。ここに、同様の食膳具集団でありながらも、首長集団としてはその内部において、質的な差を有していたであろうことが読み取れる。

②やがて、小針型壺および小針型‘系’壺を家産的土器

とした政権中枢の集団は、八幡山古墳に代表される行田市北西部の、自立した地域集団(異氏族か?)に首長権を奪われる。小針型‘系’壺と、これを主体的な食膳具とした築道下集落の急激な衰退と終焉を考えれば、その時期は6世紀の後葉から末頃に求められる。それは、埼玉古墳群での古墳築造の終息と軌を一にしている。

以上思いつくまま、小針型‘系’壺の消長と背景について、先学の研究を頼りに評価してみた。結果、諸氏の埼玉古墳群に対する分析と、先に行なった築道下遺跡の小針型‘系’壺の様相には、変遷面において高い整合性が認められた。これを一言でいえば、小針型‘系’壺とは、埼玉政権における新首長集団の家産的土器であった。ということになる。

この家産的集団内には、白色系の「小針型壺」を主用する集落と、赤橙色の「小針型壺と類似する土器」を主用する集落が存在する。周辺地域の古墳への供給が白色系であることを考慮すれば、前者は集団の核を構成するグループ、後者はそれを支えた外郭のグループ、と考えることもできる。もしそうであるならば、この土器にはある種の規制が働いていたことになる。二つの土器の違いは、首長権を握る中枢の氏族グループと、傍系ないしは擬制的な関係下に結集したグループの違いを表わすのであろうか。それぞれの集落の性格については、なおその異同を検討する必要がある。

築道下遺跡に見る小針型‘系’壺の消長は、埼玉古墳群の展開と不離の関係にある。ゆえに、沃野「忍の地」に印された一つのエポック・メーキングな出来事として、より認識を深めねばならない。